

教材としてのマザーグースの英語：いくつかの古語法について

谷 明 信

(兵庫教育大学)

早期英語教育において教材として用いられることがあるマザーグースには、現代の標準英語では見られない語法が見うけられる。これらは、古い用法や方言形を示しているものであるが、音声的なナチュラルさのために使用されていると考えられるものが多い。本論考では、このような古語法或いは方言的用法を歴史文法および方言学的な観点から考察・解説し、これにより、マザーグースを教材にする教育者に情報を提供し、かつ注意を促すことにより、マザーグースの英語を教材として用いる場合の問題点を指摘する。さらに、このような用法を含むマザーグースを英語史や英詩などへの導入の教材として用いる可能性を探るものである。

キーワード：マザーグース、古語法、早期英語教育、英語史

谷 明 信：兵庫教育大学・言語系教育講座・講師，〒673-1494 兵庫県加東郡社町下久米942-1
E-mail: tani@soc.hyogo-u.ac.jp

Nursery Rhymes as Teaching Material for Whom? : With Special Reference to Some Archaic Grammatical Items

Akinobu Tani

(Hyogo University of Teacher Education)

Nursery Rhymes represent the accumulation of the history and culture of English-speaking people. These rhymes embody very plainly what the English language is. They, however, contain linguistic features anomalous from the present-day Standard English: some are of archaic usages, others of dialectal forms. These present little difficulty to native-speaker children for their natural rhythm, even if they sound a little archaic. In recent years, Nursery Rhymes are often used as part of teaching materials in Japanese early English teaching. In this situation, such anomalous features could cause trouble to Japanese learners of English. This study aims at 1) describing some grammatical archaisms or dialecticisms found in Nursery Rhymes and explaining them from Historical English Grammar, 2) examining the problems of Nursery Rhymes as teaching materials for early English teaching in Japan, and 3) exploring the possibility of using them as part of teaching materials for "the History of the English Language."

Key Words: Nursery Rhymes, archaic usages, Early English Teaching in Japan, History of the English Language

Akinobu TANI is a lecturer at Hyogo University of Teacher Education, 942-1 Shimokume, Kato-gun, Hyogo 673-1494 Japan. E-mail: tani@soc.hyogo-u.ac.jp.

1. はじめに

2002年度から日本の小学校では「総合的な学習の時間」が導入されるが、この授業の中では英語が教授される事が多いと思われる。このような状況の中で、英語への親近感を図るために英語のリズムをジャズのリズムに乗せて教えるJazz Chantsの題材などとして用いられる可能性が高いのが、マザーグース (Mother Goose) 或いはナーサリーライム (Nursery Rhymes) と呼ばれるものである。

マザーグースは英語を話す人たちの言語文化的な背景を形成していると考えられるもので、英語のネイティブスピーカーにとっては幼児期より親しんだもので、しばしば小説の題名として用いられ、そのフレーズをもじって新しい句が創造されたりする。マザーグースはまた、その頭韻や脚韻の使用、オノマトペの使用など、音声的にも英語の特徴を遺憾なく発揮していると言える。しかしながら、マザーグースの多くは口承により伝えられてきたため、中には古い時代にさかのぼるものもある。次の表1は、Opie (1951:7) からのものである。これによればマザーグースの詩の内的証拠と関連要素により、約半数近くは18世紀以前にさかのぼれることになる。当然、この事は古い英語の特徴を保持しているrhymesの存在を暗示する。上記の表の出典であるOpie (1951) の収録している詩は本論の対象データよりも広範であるとは言え、マザーグースの約半数が初期近代英語期にまで遡ると言う事は驚嘆に値する¹。このような、古い英語の特徴を保持していると考えられ得る詩があるものの、そのような語法が保持されているのは、後で述べるように韻律やリズムといったeuphony (語呂の良さ) と密接な関係があると考えられる。

しかし、その古さや、また、英語・英国の文化と分ち難いものであるが故に、英語を母語としない学習者にとっては、マザーグースの中には、教材とするには問題があるものも有る。本稿ではこのような問題の中でも、現代の標準英語と言う観点からのみでは説明できない文法項目に特に注目する。その際、1) 上述のような古語法或いは方言形に着目して、それを記述し、方言学的・歴史的な観点からの説明を加え、マザーグースを教材にと考えている指導者に情報を提供することで注意を促し、2) このような文法的特徴のある英語を含むマザーグースを英語史や英詩入門などの教材として使う可能性を探るものである。

2. マザーグースに生起する古風・方言的な文法項目

ここでは、マザーグースに現れたいくつかの古風・方言的な文法的特徴を示す項目の例文を引用し、歴史的・方言的な観点から説明を加える。また、場合によっては、そのような用法が残存した理由も考察する。

2.1. 3人称単数現在形 *-(e)th*

3人称単数現在形の変化形は、現代英語では $-(e)s$ が用いられている。元来の古英語よりの形態は $-(e)th$ であったが、 $-(e)s$ が10世紀に *The Lindisfarne Gospels* に現れ、中英語期に北部方言より徐々に南進し始め、15世紀末から使用が増大し、散文では16世紀後半に一般化し、最終的に17世紀に $-(e)th$ に取って代わった (中尾(1972): 159-160)。16世紀にはそれらの語尾の文体差は確立されていなかったが、17世紀になると $-(e)s$ が圧倒的に用いられるようになり、18世紀になると $-(e)th$ は古語的になった (荒木他:pp.197-201)。

さて、今回のデータ中で $-(e)th$ は、後に2.11で述べる「非強調的なdo」で用いられている *doth* の3例を除いては、次の一例だけが見られる：

She brings us good tidings / And tells us no lies /
She sippeth sweet flowers / To keep her voice
clear 34/11-14

この例では、隣接する詩行では $-s$ が用いられている。この *sippeth* は、後続の *sweet* が $/s/$ で始まっており、 $-s$ という語尾を用いると同音衝突を起こすであろうが、それを避けるために $-eth$ が用いられたと考えられる。したがって、この詩は、3人称単数現在形語尾に $-(e)th$ と $-(e)s$ という選択肢が存在した時代にさかのぼる可能性がある。

2.2. 現在分詞の *a-* 接頭辞²

現代の標準英語では、現在分詞には語尾に $-ing$ が付加されるが、古形や方言ではさらに接頭辞の *a-* がつく場合がある：

Her mother heard the noise and thought it
was the boys, / A-kicking up a rumpus in the
attic, 18/9-10

The drake was a-swimming 22/13

There came an old woman a-picking them all,
28/13

While I go a-hoeing and mowing each morn;
30/13

表1

	--1599	1600- 49	1650- 99	1700- 49	1750- 99	1800- 24	1825--
さかのぼると 想定する	24.2 %	9.3 %	15.4 %	18.0 %	20.1 %	10.7 %	2.3 %

And as she was a-walking, 38/21
Simple Simon went a-hunting, / For to catch a hare; 56/13-4

Simple Simon went a-fishing, / For to catch a whale; 56/9-10

All the birds of the air / Fell a-sighing and a-sobbing, 78/17-18

Father's gone a-hunting, / Mother's gone a-milking, / Sister's gone a-silking 92/2-4

For they were still a-fleeting. 94/12

Where have you been / I have been a-hunting / The buck and the doe. 108/4-6

I'm going a-milking, sir, she said, 156/3

用例からわかるように、多くの例では、*be* 動詞や *go* や *come* と共に生起し、その使用範囲に制限があったのではないかと考えられる。もっとも、次の例では、

I'm going to the meadow to see them a-mowing, 43/3

目的格補語として使用されている。なお、これらの例での *a-* 接頭辞の使用は、詩における音節数の調節と密接に関わっている。

場合によっては *a-* 接頭辞が付加されるものとそうでないものが混交している例がある。次の例では、混交している理由は上述の音節数であろう：

The frog he came swimming, a-swimming to land, O! 139/7

また、次の例では、

Twelve lords a-leaping, eleven ladies dancing, ten pipers pipin, nine drummers drumming, eight maids a-milkin, seven swans a-swimm, six geese a-layin, . . . 188/3-6

a- 接頭辞が付加されるかどうかは、「名詞+現在分詞」の部分の強・弱というリズムを保持するためであったと考えられる。つまり、*ladies dancing* および、*drummers drumming* ではそれぞれ *ladies* と *drummers* の第1音節に強勢があり、それぞれの“-ies”と“-mers”の部分は弱音節となり、次の現在分詞形の語幹部にまた強勢が置かれる。

しかし、他のものは名詞が単音節であるため後続の現在分詞形に *a-* を付加することでリズムを整え、また *swans a-swimming* では同音衝突をも避けたと考えられる。

2.3. *be* 動詞の現在形の形態

標準英語では *be* 動詞の現在形の形態は人称により決まっている。しかし、イングランドの方言に目を向けると、標準英語とは異なる形態が見られる。Orton et al. (1978) の形態地図 M1-4 によれば、人称により *be* が用いられる地域は微妙に異なるが、主に南部で *be* の形態

は用いられている。以下のマザーグースの用法は方言形とも考えうるし、或いは、古形が残ったものとも考えられる：

Now happy be the bridegroom, / And happy be the bride.' 39/7-8

Happy be the bridegroom, / And happy be the bride; 40/5-6

I see I be not I! 143/16

さらに以下の2例では、*be* が脚韻位置で使用されており、韻のために可能なオプションとして *be* が利用された可能性がある。

Three men in a tub, / And who do you think they be? (:three) 15/3

Tell me when my wedding be; (:burnie-bee) 154/2

2.4. 不定詞標識 *for to*

中英語に用いられ始めた不定詞標識として、*to* 以外に *for to* がある。この標識は「14世紀になると衰退して行く」、そして「この傾向は15世紀に入ってもつづく」(中尾(1972):307)。荒木他(1984)にはこの標識の言及は見られないが、Orton et al. (1978) の統語地図 S3 によれば、イングランド中部と南部の一部では現在もなお、この標識が残存している。マザーグースでも以下のような例が見られたが、通常的不定詞標識 *to* と意味上の区別はない。しかし、この不定詞標識は、詩行の音節数を調整するという重要な機能を果たしている：

She stood on her head, on her little truck-bed, / With nobody by for to hinder; 18/6

[He] And bade her a fire for to make, make, make 22/9

Simple Simon went a-hunting, / For to catch a hare; 56/13

Simple Simon went a-fishing, / For to catch a whale; 56/9-10

One said he'd buy me a silver cradle / For to rock my baby in. 80/8

She went to market / Her eggs for to sell, 142 /3-4

Whenever he played they began for to dance, 168/15

She began for to fret, but he laughed at the joke. 169/10

begin と *bid* に後続する *for to* 不定詞標識の3例以外は、全て副詞的用法の目的を表現するものであるが、この事は *for to* 不定詞標識の使用の制約を示していて、*for to* 標識の消滅と何らかの関係が有るかもしれないが、これらの用例のみでははっきりした事は言えない。

2.5. 二人称単数代名詞 *thou / thee / thy* と二人称複数代名詞 *ye*

英語の元来の二人称単数代名詞であった *thou-thee-thy* (-*thine*) は、13世紀後半に導入された丁寧な呼びかけ語である二人称複数形 *ye-you-your* と競合し、*thou* は17世紀に標準英語で廃用となった。*ye-you-your* は目下から目上へ、一方 *thou-thee-thy* は目上から目下へ、また、社会的地位が同等の場合や、親から子供に対して、神への呼びかけとして用いられた (中尾(1979):166)。このように、現代の標準英語では廃用となった *thou, thee, thy* はマザーグースでは次のような例に見られる：

<thou>(主格)

If thou wilt let down thy milk to me. 27/4
 Little maid, pretty maid, whither goest thou?
 43/5
 Bonny lass, canny lass, / If thou wilt be mine,
 / Thou shalt not wash dishes / Nor yet feed the
 swine, / Thou shalt sit on a cushion / And sew
 a fine seam, / And feed upon strawberries, /
 Sugar and cream. 44/8-15
 And in it thou shalt lie. 123/7
 Pig-hog, wilt thou be mine? 125/3
 It's my belief thou art the thief 128/13
 Whose dog art thou? 146/2

次の例は、命令文とともに用いられた用例である：

When I send for thee, then come thou. 43/8
 この代名詞が主語の場合、呼応により動詞は語尾に
 -(e)*st* が付加されるが、be動詞の場合 *art* が、*will* と
shall はそれぞれ *wilt, shalt* という形が用いられる。

<thee>(目的格)

And I will give thee a gown of silk; 27/2
 Here's to thee, good apple tree, 29/1
 Shall I go with thee? No, not now; 43/7
 I'll build thee a silver sty, 125/5

<thy>(所有格)

Cushy cow, bonny, let down thy milk, 27/1

二人称複数代名詞 *ye* は、次の例に見られる：

Farewell, ye little fishes, farewell every good
 fellow, 139/1

例文から明らかなように、これらの例では *thou-thee-thy* は単に目上から目下というよりも、動物に対して、或いは同等の間柄で親しみを込めて用いられている。ちなみに、Orton et al. (1978) の形態地図M67によれば、*thou* はイングランド北部の広い範囲で使用され、*ye* もNorthumberlandの一部に残存しており、また、*thee* を主語として用いる地域がイングランド南西部にある。

2.6. *do* を用いない疑問文と否定文

現代英語では *be* 動詞を除いて一般動詞では *do* により、疑問文・否定文を形成するが、このような *do* の導入は18世紀以降に一般化した (Ellegard:162)。それまでの初期近代英語では、疑問文は動詞を倒置により形成されていた。同様の例がマザーグースにも見られる：

Pussy cat, pussy cat, what did you there?
 21/7

How go the ladies, how go they? 32/1

What gave she you? / She gave me a diamond
 42/6

次の *have* の疑問文・否定文においては、イギリス英語ではこの用法が正用法である：

Baa, baa, black sheep, / Have you any wool?
 30/2

Indeed I have not any. 56/8

また、否定の命令文でも、*do* を使用しない例が次の一例に見られた：

Up a hill hurry me not, / Down a hill flurry
 me not, 33/8-9

2.7. 不定詞の目的語の語順

現代ドイツ語の *zu* 不定詞同様に、古英語でも *to-* 不定詞は「1つの修飾語(目的語)を伴うとき、(a) X-to-inf. と (b) to-inf.-X の2通りの配列が可能で... 初期中英語では... to-inf.-X がふつうになり、X-to-inf. は文体的効果を狙ったときなどに限られた場合だけにみられる」(小野他(1972):507-8)。しかしながら、14世紀のチャーサーなどにもこの X-to-inf. は良く見られる。マザーグースの例：

[He] And bade her a fire for to make, make,
 make (:drake) 22/9

This is the time your sheep to shear. /
 (:appear) 30/10

Old King Cole laughed with glee, / Such rare
antics to see; (:glee) 121/11-12

Oh then each guest did try his best /
A cheerful look to wear, (:care) 127/14

She went to market / Her eggs for to sell,
 (:tell) 142/3-4

ここで注意しなければならないのは、このように不定詞の目的語を動詞より前置する目的が、動詞を脚韻位置に置き、脚韻を踏ませる事である。

2.8. 接触節 (contact clause)

関係代名詞が省略され、関係節が先行詞に直接後続するような節を接触節という。学校文法では通常、関係代名詞の目的格の省略しか教授しないが、次のような

There 構文に後続する、関係代名詞の主語の省略も良く知られたものである：

There was an owl lived in an oak, 35/1

There was an old woman lived under some stairs, 87/9

There was a jolly miller once, / Lived by the river Dee; 98/1-2

There was an old man came over the lea, 100/1

There was a lady loved a swine, 123/1

There were two crows sat on a stone, 161/1

上記のような *There* 構文以外での例として、以下のものが見られた：

He promised he'd buy me a fairing should please me, 116/5

2.9. 冗語の *that* (pleonastic *that*)

I will go with you if that I may. 43/2

この用例においては、*that* に意味はなく、*if that = if* である。一見意味のない *that* ではあるが、2.2の *a-* 接頭辞や2.4の *for to* 不定詞標識や2.11の非強調的な *do* と同様に、詩の音節数の加減に貢献する文法的手段である。このような冗語的な *that* は中英語では *The Canterbury Tales* の *The General Prologue* の冒頭部：

Whan that Aprill with his shoures sote, /

The droghte of March hath perced to the roote, (CT: 1-2)

で良く知られているが、現代英語では *now that* --- や *in that* --- のような一握りの接続句にしか残存していない。

2.10. recapitulation

前出の名詞を代名詞で言い換えて文を続ける recapitulation は、古英語以来見られる用法である。そして、マザーグースの次の例は、長い名詞句を主語とする代わりに、一度表現した名詞句を代名詞で簡潔に表現するものである：

Bryan O'Lynn and his wife and wife's mother,
/ They all went over a bridge together; 102/8-9

しかし、以下の用例では、短い名詞句をすぐに代名詞で言い換えている：

The church doors they stood open 26/13

The bell-ropes they were made of hay,, 26/15

Robin he married a wife in the West, 88/1

The hart he loves the high wood, / The hare she loves the hill;/

The knight he loves his bright sword, / The

lady loves her will. 97/9-12

My mother she bid me open the door; 100/5

他 100/9, 100/14, 100/19

The Queen of Hearts she made some tarts, /

All on a summer's day; 126/1他: 126/3, 127/9,

Anna Maria she sat on the fire; 134/21

The frog he came swimming, a-swimming to land, O! 139/7

Tom he was a piper's son, / He learned to play when he was young, 168/1-2

リズムと音節数が理由であるとしか考えられないが、このような短い名詞句の直後の代名詞による言い換えの理由は、はっきりとはわからない。

2.11 non-emphatic *do*

迂言的 (periphrastic) な用法の助動詞 *do* の中でも、強調的でない (non-emphatic) な *do* は、脚韻詩で13世紀頃から生起し始めるが、散文では15世紀までに稀で、18世紀を境に廃用になる (中尾(1972):332-335)。中英語の脚韻詩の用例でも、マザーグースの以下の用例と同じく、動詞を脚韻位置に置き、その動詞に脚韻を踏ませる機能を持っており、それ自体に意味はない：

Some they did laugh, and some they did cry (:by) 53/11

To wipe, he did forget.' (:yet) 129/16

The north wind doth blow, (:snow) 178/6

一方、次の2例のうち、1例目では *exclaimed* とせず、*shame* と行中韻を踏ませるために *did exclaim* としており、一方2例目の *bark* も *hark* と行中韻を踏んでいるが、それは *do* の有無には関係がないので、*do* の使用は音節数を増加させるためである：

Oh, Knave, for shame!' he did exclaim, 128/11

Hark, hark, the dogs do bark, 145/1

3. 結語

上記に記述してきた古風、或いは方言的な文法的な特徴はそれほど多くはないものの、英語を母語とする子供たちが純粋で等質な標準英語というものではなく、古形や方言形が存在する複雑な言語環境にさらされていることが垣間見られる。これらの用法は主に韻律やリズムなどの euphony とする音声的な要因のために残存したものが多くと考えられる。その意味では、古語法を含むマザーグースであっても、英語のネイティブスピーカーにとっては、ナチュラルなものであると考えられる。

しかしながら、これらの特徴は、標準英語を学習する日本の英語学習者のためにはあまり適切なものであるとは言えない。このような古語法を含む詩については、初期英語教育、また、学校での英語教育では教授資料とす

るのは避けたほうが無難であろう。ただし、これらの用法を含む詩を避けたとしても、教授者は当然の知識として上述のような代表的な語法については理解しておく必要がある。

一方、より上級の学習者、特に大学生レベルの学生には、このような古語法、或いは方言形を含むマザーグースの詩は、Standard English以外の英語がネイティブスピーカーの身近に存在すると言う事を気づかせる格好の資料となろう。その意味で、英語学入門、英語史、方言研究などの導入には良い教材になると考えられる。また、韻律の知識がないと説明ができない事柄も多くあるので、英詩の入門にも用いうるであろう。

注

1. テキストには *The Puffin Book of Nursery Rhymes* (1963) を用いる。より網羅的なものとして、*The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes* (1951), 或いは *A Handbook of Nursery Rhymes* (1985) がある。しかし、最も広く販売されており、比較的代表的な rhymes だけを含んでおり、またマザーグースを初期段階の英語の授業で用いる指導者たちにより使われると想定されるものであるという理由により、上記のテキストを今回使用した。また、引用はページ/行という形で行っている。また、用例については、当該事項に筆者が下線を施した。
2. 米国アパラチア地方での a- 接頭辞については、Wolfram (1991) が詳しい。

参考文献

- 荒木一雄・宇賀治正朋. 1984. 『英語史ⅢA』東京：大修館書店。
池上嘉彦. 1967. 『英語の文法：語学的文体論』東京：大修館書店
小野茂・中尾俊男. 1980. 『英語史Ⅰ』東京：大修館書店。
中尾俊男. 1972. 『英語史Ⅱ』東京：大修館書店。
---. 1979. 『英語発達史』東京：篠崎書林。
ブルンナー, K. 1973. 『英語発達史』訳：松浪有, 小野茂, 忍足欣四郎, 秦宏一. 東京：大修館書店。
Ellegard, A. 1953. *The Auxiliary Do*. Stockholm: Almqvist & Wiksell.
Miyakawa, Yoshihisa and Sigeihiko Toyama eds. 1985. *A Handbook of Nursery Rhymes Vol 1. & Vol 2*. Tokyo: Kenkyusha.
Opie, Iona and Opie Peter eds. 1951. *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*. Oxford: Oxford University Press.
--- eds. 1963. *The Puffin Book of Nursery Rhymes*. Harmondsworth: Puffin Books.
Orton, Harold, Stewart Sanderson and John Widdowson eds. 1978. *The Linguistics Atlas of England*. London: Croom Helm Ltd.
Trudgill, Peter and J.K. Chambers eds. 1991. *Dialects of English: Studies in Grammatical Variation*. London: Longman.
Wolfram, Walt. 1991. "Towards a description of a-prefixing in Appalachian English." in P. Trudgill et al. eds. *Dialects of English: Studies in Grammatical Variation*. pp.229-40.

(2001.7.31 受稿, 2001.9.17 受理)